



開拓使と清国人たちが交わした条約書

(写真：原本は北海道立文書館所蔵)



道大学)の付属農場となったことなどにより、開拓使札幌本庁の判断で、丘珠地区に入るようになったのである。栽培用の農地は与えられるはずだったのが、新たに開墾もしなければならなくなった。

予定変更の丘珠開拓

丘珠地区は、一八七〇(明治三)年に山形県からの移民によって開拓が始められていた。しかし、開拓使本庁のある札幌市街地と小樽の港を結ぶ道路ができて以来、札幌―小樽間に比べて、篠路・丘珠から石狩方面の開発が遅れていたため、彼らが丘珠開拓の一端を担うことになったので

ある。

一八七六(明治九)年六月七日、丘珠に入った彼らには、閉鎖されていた養蚕所が宿舍としてあてがわれた。大きいのが、がらんとした粗末なもので、開拓地からの外出には、開拓使の役人の許可を得ることで、女性が宿舍に入ることが禁じるなど、ひたすら開拓に従事するように仕向けられた。開拓は、わずか十七日目に、リーダー役の農民、梁維升(リヤン・イシヨウ)が脳卒中で倒れてあつげなく亡くなるという、波乱の幕開けとなった。彼は、清国中央政府の元官僚、農業に精通した有能博学な人物で、農民十人を集め

た時の窓口役でもあった。約束と違う仕事内容やリーダーの死亡により農民たちの士気は落ち、ビールの原料調達も危ぶまれ、村橋は非常に頭が痛かった。

進む開拓と事件の挫折

しかし、彼らも、一旗挙げようと異国の地へ乗り込んで来た以上、頑張るしかない。気を取り直して開拓に励んだところ、耕作地は次第に増え、大麦のほか、大豆、麻、白菜、野菜(白菜の一種で結球しない品種)などが栽培された。それは周囲の予想を越える進捗よくぶりだったようで、丘珠の村人たちも見学に来たり、白菜の種をもらったりした。白菜は山東省から持ち込まれた品種で山東白菜、あるいは芝罘(山東省の港の地名)白菜と言われ、重宝がられた。

開拓が軌道に乗ってからも、波乱は続いた。まず、二人の農民が農耕用の馬を、深夜の札幌の街で奇声を上げながら乗り回す騒ぎを起こした。開拓生活の中で若さを持て余し、暴走族と化した二人が開拓地から追放された。

さらには、殺人事件も起きている。二人の農民が、契約期間満了後も丘珠に定住し、大豆を使った製油工場を設立しようと開拓使に相談したが、却下された。工場ができると、食生活に不可欠な大豆が不足し、新たな作付けが必要となるので、その提案は、北海道の当時の状況からは、時期尚早だったようである。工場を興し、札幌の女性と結婚することなど、将来の青写真を描いていた彼らは希望を失い、一人がもう一人を殺し、自らは井戸に身を投げてしまった。

開拓者たちのそれから 〜栄光

こうして一八七八(明治十

一)年十二月、三年の契約期間が満了した時に、残っていたのは、最初の十人のうち五人だけであった。そのうち三人は、稼いだお金を持って故郷へ帰ったが、二人が丘珠に留まっている。彼らは帰化を申請し、許士泰(きよし・たい)范永吉(はん・えいき)という日本人に



許士泰は北区篠路の教願寺に眠っている

なった。二人は開拓使に手厚く処遇され、また、それに応えるように立派な仕事を続けた。北海道が干ばつに見舞われた時にも、許士泰の農場は、研究努力の成果で、穀物が見事に実っていて、調査に来た役人が「あまりに見事で驚いた」ことが記録に残っている。一八八七(明治二十)年には、丘珠に天皇家の農場「御料地」が置かれることになり、その開墾・運営を、許士泰は引き受けている。許士泰は、その後、篠路村(現在の北区篠路地区)の女性と結婚し、彼らの次男は、後に札幌村の村長や北海道議会議員を務めている。その次男の妻も、札幌市議会議員を務めた。范永吉は、一九〇三(明治三十六)年まで許士泰と共同で農場を経営した後、空知郡栗沢町に移り、農場を経営した。